ブラームス：ピアノ四重奏曲第3番 ハ短調 作品60

ブラームスはこの曲の出版に際して、「頭部と、その前にピストルがある口絵を書いてもよいでしょう」という手紙を出版社の社長に宛てて書いたと言われています。これは、主人公の青年が失恋による絶望からピストル自殺をするという、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』を引き合いに出したものであり、このエピソードからこの曲は「ウェルテル」と称されることがあります。
この曲の最初の構想は、出版のおよそ20年前に遡ります。当時はブラームスにとって「ウェルテル」的なセピア色の青春時代でした。当時、ブラームスを音楽家として高く評価していたシューマンが入水自殺を図り、精神病院に収容されたことをきっかけに、ブラームスはシューマンの家族を助けるために奔走し、クララ夫人に対する叶わぬ恋に苦しんでいました。
楽曲に関するこうしたエピソードやブラームス自身の伝記的な側面を、ただちに楽曲の内容解釈に結びつける行為について、音楽学者たちは慎重な姿勢を取っています。しかしながら、音楽を受容する聴き手にとって、鈍色の雲が立ち込めたような陰鬱な気分の中に時折差し込む光や、どうしようもなく湧き上がってくる情熱の表現、甘く苦く切ないメロディーが絶え間なく交錯するこの楽曲は、ゲーテが悲劇的な物語に込めた青春の激情と美しさを想起させ、またブラームスの内向的で不器用な人間味をも感じさせます。

第1楽章
冒頭のピアノの鋭い1音と、弦楽器の重く痛ましい嘆きのフレーズは、作品全体を印象付けるインパクトのある主題となっています。その後、音楽が動き出すと、上昇して長調で主題が展開し、再び深く沈み込む短調に戻るという、行ったり来たりの動きを繰り返します。各楽器が互いに折り重なりながらメロディーを形成し、うねりながら進行していきます。鈍色の雲の間をジェット機で飛行するとき、きらきらとした太陽の光と暗く重い雲の影がめまぐるしく交錯するような風景を思い起こさせる展開です。

第2楽章
鋭く細かい三連符のリズムの上に、裏拍を使った噴出するようなメロディーが呼応します。このモチーフが、楽器が担当を入れ替わりながら進行していきます。火山のマグマがエネルギーを内に秘めながら小さく噴火を繰り返す様子や、山に棲む魔女があやしげな薬をぐつぐつと煮立たせているかのような光景を想像させます。また、静めたいけれどもどうしようもなく湧き上がる激情に苛まれる心をも感じさせます。

第3楽章
チェロの伸びやかで甘いメロディーが、解決を見ることなく永遠に続いていきます。喜び、幸福感、哀しみ、そして痛みが交互に呼吸をするように膨らんでは鎮まっていきます。この感情のふくらみは心の内側で完結しており、決して表に現れてくることはないかのようです。愛の喜びと同時に、どこか哀しげで一途な思いが込められているように感じられます。

第4楽章
ピアノが作り出す安定した2拍子の上に、弦楽器の不安げなメロディーが乗ります。「運命」のテーマが引用され、叩きつけるような三連符が繰り返されます。激しさと静けさが交互に繰り返され、緊迫感を保ちながら進行していきます。突如として、ピアノが天啓のような長調のファンファーレを奏でますが、その後、再び怪しげな雲の中に沈み込み、それまで激しくみなぎっていたエネルギーが長い息づかいで徐々に収束していきます。そして、不意に力強い長調の幕引きを迎えます。この突然の終わり方は、どこか釈然としないぶつ切れ感があり、作曲者が意図した謎かけのようにも感じられます。

解説　*SeetalClassics Tokyo*　Maya Haneda